

令和6年度第2回松戸市文化スポーツ推進審議会 議事録

1. 開催日時	令和7年3月17日(月) 18時～20時30分
2. 開催場所	松戸市役所 新館7階 大会議室 (zoomによるオンライン含む)
3. 出席者等	【委員】(名簿順) 13名 熊倉委員(会長)、田簀委員(副会長)、小島委員、 岩下委員、菊田委員、坂委員、局委員、大成委員、 菊地委員、武田委員、羽賀委員、山根委員、和座委員 【松戸市】 文化スポーツ部長、学校教育部長 生涯学習部兼文化スポーツ部審議監 文化スポーツ政策課長、スポーツ振興課長、 スポーツ施設担当室、国際推進課長、 文化財保存活用課長、博物館次長、戸定歴史館長、 図書館長、事務局(文化スポーツ政策課) ほか
4. 傍聴者	2名
5. 次第	1 社会教育関係団体(スポーツ団体)への補助金について 2 (仮称)松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について (1) ゲストスピーカーによる事例紹介 (2) 意見交換 3 次年度のスケジュールについて 4 その他
6. 資料	資料1 一般社団法人スポーツ協会への補助金 資料2-1 ゲストスピーカーの紹介 資料2-2 (参考)文化とスポーツを一体的に策定している他市の計画について 資料2-3 (仮称)松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針のイメージ 資料2-4 委員からの意見紹介 資料3 次年度のスケジュールについて
7. 議事	以下のとおり

開会

- ・文化スポーツ部長・挨拶
- ・小島委員・挨拶

議事1 社会教育関係団体（スポーツ団体）への補助金について

（スポーツ振興課長）
資料1を用いて説明。

（小島委員）

この審議会で補助金を承認すると、事務局が監査報告を受けて最終的な監査も審議会が行うのか。審議会としての一貫性が気になる。

（スポーツ振興課長）

審議会で監査を行う予定はない。来年度の審議会資料にて報告予定である。今回は、スポーツ基本法の「補助金の交付をする際には審議会委員の意見を伺う」に基づき、議題として提示させていただいた。

（小島委員）

了解した。

（熊倉会長）

承認形でよいか。

（一同）

了解

（熊倉会長）

本補助金の交付を認める。

議事2 （仮称）松戸市文化スポーツ創造のまち推進方針について

（1）ゲストスピーカーによる事例説明

（熊倉会長）

本審議会を迎えるにあたり、委員の皆様には事前に意見を伺った。その意見は後ほどお聞きするが、その前に、本日は市内で文化を含めたまちづくりに携わっている2団体をゲストにお招きし、勉強したい。2団体には、団体の概要、特に文化に関するご活動や、差支えない範囲で運営方法などをお話いただくようお願いして

いる。2団体にお話し後、質疑応答、ディスカッションの時間を設けたい。

(omusubi 不動産：殿塚氏) ※以下殿塚氏

3つのパートに分け、1つ目が事業概要、2つ目が文化活動、3つ目にまとめといった構成でお話する。

1つ目の事業概要について、会社の正式名称は有限会社トノコーポレーション、昭和59年設立、平成16年(2004)年から omusubi 不動産という屋号で不動産事業を始めた。現在の従業員数は31名程。「自給自足できるまちを作ろう」をテーマにまちづくり活動をしている。本社は松戸市稔台のあかぎハイツ1階にあり、支店が東京下北沢のBONUS TRACK 小田急線の再開発施設にある。

事業は、賃貸事業、売買事業、コミュニティマネジメント、エリアリノベーションの4つとなっている。賃貸事業は、空き家をDIY可能として貸しており、管理戸数では日本で一番多いのが特徴である。売買事業は、古い空き家を自社購入し、地域のデザイナー等にリノベーションしてもらい販売をするもので、収益源となっている。コミュニティマネジメント事業は、シェアスペースの運営。文化活動に紐づくため後程少し具体例をお話する。エリアリノベーション事業は、企業や行政がまちの開発をするにあたっての計画作成や実証実験の実施を支援しており、最近育ってきている事業。

文化事業につながる活動となるコミュニケーションマネジメント事業について説明する。市内には、アーティストやクリエイターが多い。先般発行の散歩の達人に紹介された常盤平の「チョモランマチョップスティックスギャラリー」も弊社のお客様。そういった方のつながりとして、八柱の「せんぱく工舎」の運営が大きい。

「せんぱく工舎」は、神戸船舶が持っている社宅を借上げ、1階が店舗、2階がアトリエになっている。継続的にイベント開催し、ここを卒業した方が近隣に店舗を構えている。地元の演劇演出家も、せんぱく工舎にいた縁で「科学と芸術の丘」のアートディレクターとなっている。松戸駅前の飲食店をリノベーションするデザイナーも「せんぱく工舎」で育った人。このせんぱく工舎は、国土交通省の「地域価値を共創する不動産アワード(第2回)」を受賞した。第1回はこのあと説明のまちづくりエイティブが受賞している。

せんぱく工舎の他、八柱のさくら通りで曜日毎に店主が変わるシェアカフェ「one Table」を運営している。今年で運営開始7年になるが、延べ28組が利用し、そのうち7組が市内で、2組が市外で、実店舗を構えており、飲食店のインキュベーション施設のような形となっている。そういった活動を通じて、事務所がある八柱近辺を中心に、徒歩圏内に18店舗の路面店が増え、市内全体でみると50店舗くらい増えた。そういった方々とコラボした催し物も展開し、去年の3月は日々祭りものを企画し開催した。

また「科学と芸術の丘」の実行委員会運営に携わっている。この芸術祭は、2018年から開始し、戸定邸を舞台に、オーストリア・リンツにあるアルスエレクト

ロニカとコラボし、アーティストの派遣、戸定邸内への作品展示、大広間でトークイベント等を行っている。アートだけの催しだと市民にとって難しさが出てしまうため、戸定が丘歴史公園で丘のマルシェを共同実施し、アーティストの西岳拓貴氏にコーディネートを依頼し、市民参加型ワークショップが生まれるマーケットになっている。千葉大学園芸学部とのコラボとして、敷地内の植物や虫探しもしている。2023年が松戸市制施行50周年や千葉県施行150周年となる周年事業だったためイベント規模を拡大し、松戸駅周辺や西口公園のマーケット、河川敷での音楽ライブも行った。この事業は成り立ちが少々特殊で、アルスエレクトロニカのコーディネーターが、市内でアトリエを構えていたときに、フェスティバルをしたいと企画し、我々が市と仲介し、相談しながら事業の実施につなげた。そのため、市民参加を大事にしており、運営自体をカタリストボランティアに手伝ってもらっている。カタリストは市内の方も多く、引越後も遠方から参加するなど、この事業のよいところ。

最後に事業性について、弊社の4つの事業のうち、賃貸事業やコミュニティマネジメント事業は、まちに文化的な価値を作る面白い人を集める事業だが、収益性は低い。そのため不動産売買事業やエリアリノベーション事業をやりながら、経済的に成立させている。その両方を組み合わせることで、空き家の活用しながら、それらを通じたまちづくりをトライしている。面白い人がまちに集まってきてお店が増えるとそのまちが気になる。不動産売買やレンタルスペースの運営を通じて、そこにくる人を増やす手法をとっている。

（まちづくりエイティブ：寺井氏）※以下寺井氏

先ほど殿塚氏から話があった「地域価値を共創する不動産業アワード」について、2年連続で大阪、東京、福岡以外の都市のまちづくり会社を選ばれた事例はない。そういった意味で、松戸はまちづくりに力が入っていることになる。

はじめに我々の会社は、2社体制で、役員レベルが5～7人、社員は取らず、アルバイトやパートが4～5人いるチームとして、少人数で行っている。

株式会社まちづくりエイティブは、都市再生、再開発コンサルティングを行っており、松戸でのまちづくりの実践が大元になっている。

NPO 法人 KOMPOSITION は、福祉団体で千葉県の居住支援法人で、シングルマザー、外国籍者等、困難を抱えた方向けの住居提供を中心に活動している。

私自身は、元々渋谷でアートやスポーツなどの若い表現者に対し、公共空間等の街中で活動を支援しており、そうした活動を経て、まちづくりの団体を作り、松戸で活動している。

元々殿塚氏と一緒にやらせていただいたため事業内容は似ているが、我々は松戸駅前にこだわっているのがちがうところ。「MAD City」のロゴは松戸駅周辺の地図を囲うようになっており、基本的には松戸駅から徒歩圏内に絞って活動している。不動産を借りている方は半分程度で、不動産以外で一緒に事業を作っている方が多

く、不動産業でまわしていくより、自分たち自身が地域で事業を作っていくことを目指している。経済的なビジネス展開の手前に文化的な土台があるという認識で、アーティストやクリエイターが集まるところにビジネスが生まれると考えている。特に、最近は、事業者に近い方々、更には困難を抱えている福祉ケアが必要な方々と一緒に事業を作っていく形となっている。

次に、事例の紹介に移る。幅広く事業展開しているが、そのうち、広義でみて文化に関わっているんだらうと解釈される活動を紹介する。

最初にやっていた活動のひとつが、「松戸まちづくり会議」。松戸駅周辺の19自治会で構成され、松戸アートラインプロジェクトとして、西口公園、河川敷、中央公園等の公共空間の利活用をする際に、アーティストだけでなく、町会や学生等の地域の方々に地元組織を創成し、活動していた。駅前の元ホテルをアーティストインレジデンスの活動拠点にした「PARADISE AIR」についても、立ち上げから5年程は関わっていた。

それ以外に、自社スペース、まちづくりにおいて自分たちの公民館のような場所として、「FANCLUB」イベントスペースの運営を維持している。これは13～14年続いている。発端は50代の方々がディスコを作りたいと言ったことがきっかけ。今はその方々は60代になっているがDJをして毎月イベントをやっている。このような10年以上続くイベントスペースは千葉県内でみてもないことから、最近は20～30代の若い世代のヒップホップ系の方々が、活動拠点としている。

「商店街をつくる」取り組みも行っている。商店街自体は商工振興の枠組みだと思うが、弊社でやっているのは4メートル・2店舗から商店街化していく取り組みで、(近辺のみで商店街を形成するのではなく)他の地域からともつなげる仕組みとすることで、店主の趣味関心や取り組み等、文化的な強みなど、方向性が似ている人たちが集まる新たな形の商店街づくりを松戸駅前で開催している。

その他、地元の老舗店の中には、店の裏側に庭園や茶室があるような歴史的な資源がある老舗店が多々あるが、十分に生かされていないのがもったいなく、地域貢献的な意識を持ちながらリニューアルやイノベーション事業をやっている。松戸の葛西屋呉服店のリニューアルやイノベーションに関わり、設計、デザイン、工務店をまとめるプロデュース役を担った。そういった意味では、地域の特徴的な老舗店と共に、ある種文化的な再生のようなこともご協力できればと思っている。

アーティストとの関わりでいうと、彼らがどうビジネスを起こせるのかことに関心を持って関わっている。プロジェクト型だとmcg21xoxo、駅前ビルの地下に半年ほど、ニューヨークから帰国したアーティストと一緒に活動を行った。これはオフサイト型ギャラリーと言い、人が行きにくい場所にわざわざアートをスペースを作る取り組みである。

今も続いている取り組みで言うと、オーストラリアからきたアーティストと共に、アップサイクルリメイク等の商品を仕入れ、販売するストアの運営等も行っている。

まちづくりに近いもので言うと、公共空間を中心に、お客様がどう使っていける

かを社会実験として関わることが多い。松戸駅前エリアのエリアマネジメントをやる商店街3町内会を含めた会議体があり、そのメンバーに入っている。現在は松戸の駅前でクラフトビールの醸造所が集まりクラフトビールフェス等を定期的に行っている。このフェスはクラフトビールをただ売るものではなく、まちの中に飲食店がつながるような文化を作っていくのが目的。現在は、はしご酒スタンプラリーも行っている。

我々は屋外・屋内の差はないと考えており、文化ホールの利活用についても検討している。30年近く形が変わっていない公共施設をどう利活用するかという視点で、屋外の社会実験のノウハウを入れ、ZINE フェスや、不用品のおもちゃを集めて即興劇を開催し最終的には余ったおもちゃは交換する不用品のリサイクルのような取り組みを行っている。

最後に我々の運営について、松戸で行っている事業は、基本的に大儲けはしない。持続できるビジネスとなっており、物件を貸した事業者とどのようなビジネスができるかを常に考えている。松戸は日常生活を行う生活都市でなので、本質的に、日常性にこだわりながらやっている。

地域のコミュニティづくりで考えると、我々のコミュニティだけでは足りないと認識し、アソシエーションを作ること考えている。地域コミュニティは習慣慣習、伝統歴史ものがあり、新しいものを作っていくのは不向きな組織なので、それとは別の人の集まり、アソシエーションを作っていくことを目指している。

松戸に対する我々の認識は、50万都市であるがゆえに、人的資源に恵まれている一方で、プレイヤーが渋滞していると感じる。その方々をつなぐコーディネーターも各分野に配置されているが、コーディネーター同士が断絶している。これからコーディネーター人材の必要性が増していく。その辺りが、我々が人や体制に関して思うところである。

資金的な運営については、大儲けをするビジネスを作ることが重要と思っておらず、1つ1つの文化活動をビジネスとして実現していくが重要と考えている。そういう意味では、ソーシャルビジネスの要素を支えるために、今までビジネスとして成り立っていなかったものをどう成り立たせるか、行政の規制緩和とどう絡めるか、特にエリアマネジメントはまちづくり分野の話ではあるが、こういったことが1つ1つの文化的な営みに適用できるのではないかと考えてやっている。

(熊倉会長)

ここから2つのプレゼンテーションに対して、委員の皆様とのディスカッションの時間とさせていただく。質問、意見などあればお願いしたい。

(武田委員)

omusubi 不動産は、常盤平のイベントスペースで松戸市の展覧会とコラボレーションし、トーク企画をワンデーカフェで展開していたと記憶しており、本日の話で、

科学と芸術の丘の運営など、更にいろんなことをやっているのだと知った。松戸で事業をやり始めて数年経ち、松戸でのやりやすさややりづらさ、課題感のようなものがあったら、忌憚なくご教授いただきたい。

(寺井氏)

我々が松戸で知られることには重きを置いて活動していない。最近行ったクラフトビールフェスについても、その運営に携わっているが、我々の名前は出していない。日常の中で我々が松戸市の中に溶け込んでいくよう、市と一体化していけるようなことが起きればと思っている。

松戸市でのやりやすさとやりにくさについて、まちの持っているポテンシャルと比べた時に、行政側の自己評価が低く、政策的に高い目標設定や意識自体が無くなっていると感じる。都市間競争の中で、松戸は上位を狙える都市だと思っているが、行政側がそういったことを目指していないように感じられる。考えていないのことは実現できない。松戸が持っているポテンシャルを十全に発揮できる行政の存在であっていただきたい。それ以外にやりにくいところはない。

(殿塚氏)

やりやすさ、やりにくさについて、寺井氏の話とも重なるが、我々も omusubi 不動産名前が出てこなくてもよいと思っている。住民に松戸の文化活動とそれに派生していいお店ができていることは知ってほしいので、我々は1階にお店を作ることここだわって活動してきた。地元出身目線で言うと、100人のアーティストが来るより、1つのカフェができた時の方が地域でインパクトがあり、こうしたわかりやすさが大事だと感じている。

私も地元出身で、割と松戸を卑下していたし、同世代の方も下げて話すことが多いが、この前入居した市外の若い方は、松戸が大好きで、活動に関わりたくてしょうがないという話を聞き、新鮮に感じた。松戸に住んでいる人の意識が世代によって大分違うのをポジティブな意味で感じている。

やりやすさについて、松戸は地元の方々、いわゆる地権者の方が、寛容と思うことが多い。この10年、アートラインから始まり、PARADISE AIRがあり、その受け皿を町内会の連合会がやっているところが寛容な土壌を育んでいるのではないかなと思う。他の地域で同じことをやろうとすると、住民との話し合いで行き詰ることが多々ある。それが無いのは松戸にとって高いポテンシャルであると思う。

やりにくさは、地元だからかあまり感じたことはない。高度経済成長期に街が大きく成長し、その時の施設や制度が今更新の時期。他の街だと地域の担い手を探し育てるところからやらなければならないが、松戸は、ある程度プレイヤーがいるのが相当なアドバンテージ。そういったところで協力してやれたら理想的だと思う。

(寺井氏)

補足すると、市の行政がフラットに多様なプレイヤーや民間と一緒にやれば変わる。市の職員に自信が持てず、忸度や委縮が多く、民間として前向きに組みづらい。

松戸市の人材資源・民間事業者が豊かで、それが強みでもあり、人材渋滞が起きやすいというのも弱みでもある。しかし、文化も含め総じてまちづくり領域で、松戸市は全国有数の上位になれるポテンシャルを持っているので、市も高い目線で官民連携、民間事業者の目利きする意識を持ってほしい。

市の縦割りの打破は民間事業者が解決するしかない。そこは民間側のコーディネーターをうまく使うことが重要で、それも自部署から他部署に横断をするぐらいの期待や仕様が望ましい。

そのうえで、コーディネーター人材を活かしたり評価したり育てたりすることを政策に盛り込むのがよいのではないかと思う。また、既存の地域団体以外とのパートナーシップやアソシエーションの形を模索すべきであると感じる。文化とスポーツとなればその重複部分にまちづくりが絡んでくるため、規制緩和を伴ったソーシャルビジネスの掘り下げが有用ではないかと思う。

個人的に、松本清市長の施策等も研究しているが、その時の気風を受け継いだ方々が今もいる。だからこそ松戸が自信を取り戻し、まちを変えていくことをやってほしい。

(omusubi 不動産：関口氏)

先ほど殿塚から紹介があった「科学と芸術の丘」を運営しているゼロファクトリアル代表理事も務めている。「科学と芸術の丘」は、私たちがやりたい形で展開され、それは、この10年間、文化に力を入れてきた施策がなせる業だと思う。この事業に携わるまで、松戸を知らなかったため、私自身も関係人口の一人かと思うが、「科学と芸術の丘」の活動を通じて、松戸が面白いといって来てくださる方を目の前で見て、その効果は確実に表れている。

こうした効果をどう可視化し、価値をどう表現すれば伝わるか、考えている。「科学と芸術の丘」では、カタリストと表現するボランティアスタッフがいることを、文化庁をはじめ、各方面から評価いただく。市民が主体的に楽しんで参加している点大きい。これは、日常的にいろんな人とコミュニケーションをとりながら、クライアントワークでやっただけではできない関係値があるためであり、我々が不動産事業等を通じて、まちで事業をしている方が事業に携わるメリットが大きいと感じる部分である。

やりづらさでいうと、単年度で予算を取って進める形であり、この事業に参加したい専門人材はたくさんいるが、長期的な仕事としてみたときに難しく、長期的に考えられると、法人相手との連携も提案できると思う。

(坂委員)

日々ボランティア団体との付き合いがあるが、市民活動をしているボランティア

はそれぞれ点であり、市民活動サポートセンターはハブとなっているが、個々がいい活動をしているだけではつながらないのを実感している。アーティストもひとりひとりは点で、クリエイティブな活動を展開する中でつながっていく。ボランティアも、数ある点をコーディネートしてつなげていく、スキームができればいい。

文化・スポーツに対して、点であるものを線に、そして面にするにはどうしたらよいか。皆様がやったノウハウ等の力で展開することはできるのか。

(熊倉会長)

寺井氏のプレゼンテーションの最後には、コーディネーターがもっと必要だ、ことだったが、そのあたりはいかがか。

(寺井氏)

まさに、おっしゃるとおりのことを私も感じており、コーディネーターという言葉を出した。点がつながっていくことは重要だが、なぜそもそも点なのかの理由の1つに、行政と民間の関わりが歪んでいるからではないかと思う。そもそも民間は、行政のお金をあまりもらわない方がいいと思っている。民間が行政からお金をもらうと、問題ごとが起こる。正直金額も高くないので、長い目で見たらあまり利点はない。行政が応援すべきは、信頼と規制緩和に向けたルール作りで、お金で釣るのは一番よくない。アーティストやクリエイターに対しても同じで、お金以外のモチベーションがなければ続いていかない。このまちが面白い、ここで何かやりたい気持ちを引き出し、一緒に関わるのが重要だと思う。

点の話だと、行政のお金に紐づいて、守りの気持ちが民間側に生まれてしまうのではないか。自分のポジションを持ち、自分の分野で行政と付き合っている人が松戸にはたくさんいる。民間の応援の仕方をもう少し変えていくなど、行政側が民間に対して見極めみたいなものを身に着けると自然と点と点がつながるのではないかと思う。

NPO法人は、必要に迫られ、行政の支援だけではできないから点と点がつながっている。NPO法人や市民活動のリソースがこれだけ強いまちはそうそうなく、個人的にすごいところだと思っている。

点になっている実態を行政が受けとめ、自分たちにできることがあると思ってほしい。そのことをフラットに話す場所づくりから始めていただきたい。

(和座委員)

先ほどから人材が課題として挙がっているが定年後の方々の活躍について考えたい。松戸は東京にアクセスが良く、企業勤め人や元公務員など活躍なさっていた多くの才能あふれる人材が沢山いる。そういった方々が定年となり、活動に制限を受ける。定年後の方々は、生きがいがあれば、健康で、幸せに過ごせるだろう。定年後の方々がいろんな形で活動等に参加していければいいと思う。

(殿塚氏)

シニア世代の方との関わり方の観点で、私も和座委員の意見に共感する。私の父も70歳を超えているが、父が子ども向けの映画をやりたいと話していたのを初めて聞いた。仕事を引退しても地域と関わりを持ちたいと考えている。

春雨橋親水広場で長年やっている献灯まつりは、近隣のシニアが自主的に立ち上げ、20年近く続いているもので、草刈り等も業者に頼まず自分たちで夏にやっている。シニアでアクティブに参加できる方はたくさんいるが、関わり方をもう少しオープンにすれば、我々が知りえないことがたくさんあるのではと感じている。何かの役割をオープンに、これを手伝ってほしい等と言える場を作りたいと思う。

それとは別に、春雨橋親水広場の利活用に向けた実証実験の活動で、月に一回のゴミ拾いを始めており、最初は2人ほどしか参加がなかったが、先週末は20人ほど来てくれた。一番参加しているのは、目の前のマンションのシニアの方々と、今後も年間通じて来たいと言っていた。そこで我々もシニアの方々と話す機会があったり、アルバイトをしている学生がコミュニケーションを取ることがあったりするが、そもそも両者が話す機会がないのだと思った。だからこそそういった関わり場の場を設けて、雑談や自己紹介をする等の関係性のベースを作るところから、そういった役割が生まれてくると思っており、イベントは集まりやすい。シニアも参加できる形をうまくデザインすることで来てもらえるようになったらよい。

(熊倉会長)

長年、茨城県取手市と足立区北千住で、まちの方々といろいろなプロジェクトをやるなかで、ご年配の方は集まって同好会のようなことは楽しく活動し、力を貸していただいたりすることはあるが、自らリスクをとることはなかった。特に退職前のポジションが高いと、部下に指示してやってもらうということに慣れてしまって、説教はするが自ら体は動かさない。私の学生もまちへ出て活動しているが、ジェンダーやハラスメントの認識ギャップに驚いて帰ってくる。

その一方で、ポテンシャルは感じる。先日、平均年齢84歳の取手の農地開発をしているチームの方々が、上野の東京藝大まで来てくださって、アーティストと一緒に餅つきをやった。このように点をつないでいく、眠っている人的資源に良い関わり方を続けていただくのに、私はプロフェッショナル人材が必要と思っているが、その辺りはいかがだろうか。

(殿塚氏)

場所があって誰でも来ていいだけだと認識や価値観の差で、嫌な思いをする方がいるかもしれない。それには専門人材が必要。同じ日本人でも生きてきた文化が違う。20代と80代ではある意味、通訳が必要で、我々が、上の世代の方が言うことを理解し、20代の方が解釈しやすいように伝えることを意識してやっている。

また地主とアーティストも言語背景が違う。グラフィックをやっている現代アーティストという肩書は地主に言っても伝わらない。地主に、「きれいな新しい絵を描いている絵描き」だと通訳して伝えることで、地主が納得して応援くれることもある。この通訳はかなり特殊スキル。ただ特殊スキルは見えにくく、評価されにくい。そもそも良好なコミュニティがあることが、社会にインパクトを与えるかという指標がない。我々もそれは一つの大きな課題だと感じており、その指標を出せないかことに取り組んでいる。対外的に説明ができることも、専門人材を育成するには必要かと思う。

(寺井氏)

全くおっしゃるとおり、我々も同じようなことを行っていると思う。

シニアの方々の受け皿は、町内会やNPO法人等があり、その中で、ものすごく精力的で面白い活動をする方々をたくさん見ているが、少し疲れてきたと話す方も多くなってきた。これは、活動の持続性や継続性のところで、若い人をどう入れるかなど、その方たちにそうしたノウハウがないからだと思う。また点では存在し続けられないし、つながることもできない。だからこそ我々は「ビジネスに」こだわっている。何かの事業や活動と一緒にやるのが一番のコミュニケーションであり続けていけるポイントで、経済の世界だけでなく文化の活動においてもそうだと思う。

ある種のソーシャルビジネスとして活動をするためには、多様な人たちと関わってリソースを集めて活動を作っていく必要がある。つなぐだけではなく、その活動を持続させ発展させていく事業要素が重要で、専門人材としてはそういう意識を持ったコーディネーターが必要。そういう人は松戸に実はたくさんいると思うが、今はつながることができていない。

行政がその人たちを応援すれば、場合によっては囲い込む結果になり、結果つながらないことになる気もしている。コミュニケーションのあり方から一緒に話せる場が必要で、そういった場があると、松戸のポテンシャルが花開いていくのではないかと思っている。

(熊倉会長)

お二方の話を聞いて、やるべき第一歩が見えたような気がして、とても有意義だったと思う。せっかくの機会なのでほかに聞いておきたいことはないか。

(田簀副会長)

今ここにいる方は松戸周辺の方が多いと思う。寺井氏は兵庫県出身でその寺井氏が松戸のポテンシャルがあるとおっしゃった。内と外の視点の違いで、ポテンシャルがあると言われても気づかない人はいると思う。可能であれば、外から見た松戸をもう少し具体的に、1点か2点お話いただきたい。

(寺井氏)

私は、兵庫県伊丹市出身で、日本酒、清酒を初めて作ったまちエピソードが地元にはあるなど、まちづくりを始めて自分の地元も面白いまちなんだと思った。

2010年前後に初めて松戸に来たが、もともと自分がずっと居続けられる、自治区のような場所を作りたいと思っており、自分のライフワークとして始めたのが松戸だった。それまで松戸のことを知らなかったし、特段好きだったというわけでも、松戸が最高だったというわけでもない。

自分の何かが松戸だったら活かせるかも、逆に言うと、隙間だらけのまちだったから自分が活躍できるかもしれないと思って来た。そこから15年経って、その年月だけ松戸が好きになった。嫌な思いもあったが、全て自分の糧になっている。

いろんな専門分野、例えばアート、建築、音楽、IT など、いろいろ専門分野があると思うが、松戸には、全国でも勝負できるような人が全ての分野にいると思っている。人材が渋滞しているのはそういう意味でもある。他の少し規模が小さいまちは、まちの代表者が数人しかいないので、その人たちが集まって、スーパーチームをつくりまちを盛り上げている。松戸は、私の知らない方も含め、専門分野のプロフェッショナルが何百人といっているのではないかな。そういった方々がたくさんいて、逆に何の力にもなっていないくて、結果市外で活躍し、実は松戸生まれだったことを知る機会が多い。それが松戸のうまくいっていないことであり、ポテンシャルでもある。

(熊倉会長)

ゲストスピーカーには長時間つきあっていただき、勉強になった。一旦ここでゲストスピーカーの皆様とお別れし、議事の進行に移る。議事(2)について、事務局から説明をお願いする。

(2) 意見交換

(文化スポーツ政策課長)

資料2-2、資料2-3を用いて説明。

(熊倉会長)

計画や方針とは市役所の中で拘束力を持ち、計画や方針がないと、首長の思いが強くなりすぎたり、逆に予算がつきづらかったりすることがある。そのため、前回の審議会の発言等も含めて、委員から思いついたこと、こういうふうになればいいなど、自由に述べていただきたい。その取っ掛かりとして、僭越ながら事前に意見をうかがった。

先ほどのゲストスピーカーの話の中で、行政が意識の話があったが、私からみても危機感がなく、前回の審議会を聞いても、委員の皆様もすでにとても充実した活

動をやっており、1つ1つの点が長い活動の歴史を持っていて、充実しているのだろうと拝察した。

その一方で、今日のゲストスピーカーの話を始め、Uターン組やIターン組、もしくは全く違うレイヤーで新しいことが起こっていて、人口50万人だと行政に頼らなくても面白いことを作り出す活力が生まれていることも感じた。ただ、これがベーシックな市民活動と、これまではあまりつながりを持っていないようだ。

本日のゲストスピーカーの話を聞いて新しいレイヤーで起こっていることを踏まえてもいいし、皆様の活動の中から何かこういうことがあればもっと活動が広がりを持てるとか、まち全体に影響を及ぼせるのではないかとを含めて、資料2-4の順に、お話いただきたい。

(局委員)

会長からの事前の課題に正直驚いた。私たちは日々、人と音楽と向き合っており、音楽協会は、合唱連盟、器楽連盟等の連盟活動が活発になり発展して継続していくことを考えている連合体で、まちづくりにまで視野を広げて考えを持ったことがなかった。そのため、課題について考える際には、事務局長の考えも参考に、私個人と音楽協会、2つ書かせていただいた。

音楽協会の全体の総意としては、活動を活性化させていくためには潤いが大事であるということ。そのために、活動する場がどのような環境は重要である。

私個人としては、一番末端のところでの人と向き合いを考えている。松戸にはたくさん能力を持ったポテンシャルの高い方がいらっしゃる。その一方、市民会館、市民劇場、森のホールは、老朽化もあり使いづらい部分もあり、外のホールで演奏会をすることも増えている。前回の審議会では、今後の新しいホールについてのビジョン等があったが、実際使う人たちの意見を聞いていただきたいと考える。

(岩下委員)

私も会長から課題について、何をどう言っているのか悩んだが、自分の得意とするスポーツで意見を書いた。

特別支援学校の教員なので、障害を持った人も含めて、誰でもスポーツができる場づくりと多様な人の参画は、基礎として必要ではないかと思う。

海外サッカーは大きなスタジアムに毎回満員の客が入るが、自分が参画できる魅力や環境があれば、みんなの力を一極集中できるきっかけになると感じる。それが何かの答えはないが、気持ちが前向きになるようなものがあるといい。

先ほどの、点と点がバラバラである話で、いろんなスポーツ団体が各々の種目をそれぞれの場所でやっている際に、参加したい人がその情報をすぐにももらえるところから始めていくと、市民の参画の機会が増えていくと思う。

また、今、障害のある子たちとユニバーサルスポーツであるフロアホッケーをやっている。細川元首相の奥様が、フロアホッケー協会を設立した際は、障害を持っ

た人も、健常者もみんなのできるスポーツを広めたいとおっしゃっており、葛飾区を中心に活動が広がっている。

(坂委員)

松戸のまちづくりに向けての課題では、子ども会は小学校を中心に、資料に考えをまとめた。地域のアイコンを形成すると考えた時に、連携はしなければならないし、積み重ねは絶対に必要。松戸市の特性を活かした場合、事例からタイトルをつけたが、例えば地元のアーティストと住民の連携プロジェクトは、クリエイターの育成や空き店舗アートプロジェクト等記載したが、ゲストスピーカーの方々の事業の話を聞くとあながち空想ではないと感じた。文化とスポーツの融合に向けて、住民参加を促す仕組みづくりや持続性の確保が課題かと思う。ネットワークの構築の話もあったが、地域ニーズの把握、自治会・NPO 法人との協働の強化、行政は施策の方向性の設定や部署横断的なプロジェクトチームの設置が必要かと思う。

ネットワーク構築の実現ステップとしては、まず組織を設立する。例えばこの審議会をベースとする組織をつくり、市民の意見等をベースにビジョンを作る。それに応じた協議会を作っていくステップが必要かと思う。プロジェクトリーダー、若い人の意見も必要。先ほども話があったが、若い世代と高齢世代、みんな共存している。そのため我々だけでなく若い人たちも入れて考えなければならない。

他市の事例としては、資料には記載していないが、柏市で開催された図書館等に関する文化複合施設と地域づくりの講演があり、講師の方から「文化的な施設と地域の関係は関西を参考にしては」というお話があった。関西の枚方、吹田、守口、東大阪は人口規模も似ているし、大阪を核とした衛星都市の参考事例として、検討してもよいかもしれない。

(熊倉会長)

文化施設の他に経済面の関係もあると理解した。

(菊田委員)

生まれも育ちも松戸ではないが、息子に障害があったことから、当時市内に2つの県立特別支援学校あり（現在は3つ）、大病院も松戸市立病院と千葉西総合病院もあり、療育をする発達センターもあったことから、そういった条件で松戸を選び引っ越してきた。

当時は、息子が文化やスポーツをどれだけ楽しめるだろうか視点でみてはいなかったが、松戸に住んでみて、大きな公園があり、都会にある夫の職場も近く、文化やスポーツの面でポテンシャルは高いと思った。

ただ、松戸駅含む主要な施設や活動は、市の南側に寄っている。私が住んでいるのは市の北側で、松戸駅周辺へのアクセスはあまりよくない。息子は車いすだが、松戸駅周辺は駐車場も少なく、バリアフリーへのハードルが少し高い。

障害者と一口に言っても困りごとは多岐にわたるため、文化やスポーツのポテンシャルを上げていくためには、参加しやすい雰囲気づくりや、物理的なバリアを取り除いていくところを増やしていただけるとありがたい。

またスポーツ施設や交流施設を建てる時には、何かに特化した施設よりはいろんな競技ができるような空間づくりや、障害者が行きやすいような駐車場の確保をお願いしたい。皆が参加しやすい建物づくりやまちづくりを考える際には、障害者も、完成する前に計画を確認させてもらえる機会みたいがあるととてもありがたいと思う。

（菊地委員）

子どもも大人も、本物に見たり触れたり体験する機会は大事だと思っている。

学校教育では、スポーツに関しては外部講師を招く授業が結構ある。スポーツ好きな子どもはたくさんいるため、とても喜んでいる。一方、松戸には美術館がなく、美術に触れる機会がもっとあれば良いと思っている。

松戸市では、言語活用科、文部科学省から認可をいただいた独自の教科をやっている。言語学習も含めて、自分の考えをわかりやすく伝えるスキルを学ぶ教科だが、その中には、絵の情報から、この絵に描かれている季節や天気などを、自分で考え意見する取り組みがある。

欧米では、こうした活動を美術館に行って、プロが描いた著名な作品から絵を楽しむことをやっている。そういう文化が松戸でも育ってほしい。学校教育でやっていることを、地域をフィールドとして発展させることが必要である。

子どもたちも個性があり、スポーツに興味がある子、図工・美術に興味がある子、どっちも興味がある子、どっちも興味がない子など、様々。学校で学んだことをさらに自分で広げていくフィールドが松戸にあるとありがたい。

（大成委員）

どのような松戸のまちづくりができるかについて、「文化芸術、スポーツを通して子どもや青少年、様々な年代の市民が交流し、創造性を発揮できるアクティブなまちづくり」は可能であると思っている。創造的やアクティブ言葉は必要。

先ほど話が合った寺井氏とは2010年松戸アートラインプロジェクトから一緒に事業をやらせていただいている。その頃から松戸はポテンシャルが高く面白く、創造的で、アクティブなまちである。

先日発行された晴耕雨読にアート特集がされており、アートパークは私が美術を専門としている聖徳大学、地域団体、松戸市が協力し、松戸中央公園で子どもたちと一緒に1日アートを楽しむ活動で17年続いている。21世紀の森と広場でやっている松戸アートピクニックも、子どもたちと関わりながらできる活動が10年以上続いて定着してきている。

私の大学のゼミでも松戸の魅力を紹介するフリーペーパー「まるま」を観光協会

と共に作っている。1年に1冊作っており、松戸の魅力を学生目線で紹介するもので、ビジュアル重視の小冊子だが、そういったものがまちの中に出て行って、いろいろな人に見てもらい、まちが動いていけばいいと思っている。

また松戸にはけん玉日本一の MIZUKI さんがいて、けん玉が少し流行りだしていて、スポーツとアートをつなげられるのではないかとと思っている。

地域アーティストの活躍の場について、高松市には芸術士として幼稚園や保育園にアーティストを派遣する事業がある。また東京藝大がやっている取手の VIVA の活動では対話型鑑賞の活動として、学生が作った作品を展示し、来場者と対話しながら見ていく。地域資源としてアーティストが数多くいると思うが、そういった人をより活躍できるためには、教育や保育とつなげていくことで発展してやっていけるの考える。

（武田委員）

課題をうけたときに、教育委員としてこの10年松戸を見させていただいたこともあって、連携の難しさに対する気持ちがまず出てしまって課題を難しく考えてしまったが、思ったことをそのまま書けばよかった。

もともと、学校現場と、市長部局側が展開している施策がかみ合わないイメージがあり、どちら側にも守りたいものと推進したいものがある印象である。この審議会や市の組織が立ち上がり、機動的に実行できることが一番望まれている。

これまでの事例の中で、一番うまくいった事例は音楽フェスティバルだと感じる。アートピクニックも、大成委員にハンドリングが代わってからは小規模で継続的にできていることが良い成果に繋がっていると思う。

様々な現場に行く中で、やる側の前のめりの気持ちと、受け手側の我慢している気持ちがそれぞれあって、それを考えてしまうといろいろなことが動けなくなったり言えなくなったりする。もっと自由にやりたいこと賛同出来ることをお互いに出して、そこから考えればよい。

事前意見の中、サッカーの元日本代表監督の岡田氏が地元で10年かけて大きなスタジアムを建設した話をテレビで拝見したことをあげた。夢とその達成の為にストーリーをきちんと描いて、参加する方々に伝えていく道筋がないと、継続し、拡大、発展することはなし得ないと感じた。何かを始めるにしても、目標やストーリーが大事。今やっている新しい動きは、そういう進め方でやってほしい。

（山根委員）

ハーバード大学が80年以上かけて人間の幸せはなにかを研究した結果、富でも名声でもなく人間関係である結論が出ている。素晴らしい人間関係やコミュニティを継続的に作り続けることを重視してほしい。

先ほど、昭和世代とZ世代の言葉が断絶している話があったが、ソクラテスの時代から「今の若者は」と言われ続けており、世代の価値観はグラデーションのよう

に変わっていくのだと理解している。それを励ますような形が取ればいい。

クラシック音楽の事務所をやっており、著名なクラシックギタリストとの仕事で、その方のプログラム作りとして、全体を大幅に変えるのではなく、ある曲が飽きてきたと思うとその曲を外して1曲足す。また飽きてきたら1曲外して違う曲を1曲足すというやり方をしていた。自分の中でのマンネリ化を防いでいることもあるが、新しいことを一気にやるのではなく、段階的に、1つ1つ新しいものを取り入れていく。音楽家は50～60年と舞台に立ち続けることを目標にしており、一気に変えてしまうと刺激が強すぎるので、ゆっくりと変えていくことで何かよりよい結果が生まれていく。松戸市の文化政策の中でもそういうことが生まれれば良い。

最後に、私もいろいろな公演に関わってきて、失敗をたくさんしてきた。自分が経験した失敗は忘れない。失敗を恐れず新しいことにチャレンジする、若い人がチャレンジしたいと言ったらさせてあげるといふ土壌を持ち続けていきたい。

（羽賀委員）

車いすラグビーしかやってこなかったため、まちづくりだとか、地域課題だとかは考えたことがなく、難しかった。その中で、プロスポーツチームがあるまちは、チームを中心に、子どもたちのチアリーディングスクールやユースチーム等があり、ホームグラウンド、拠点的な盛り上がりがある。

また車いすラグビーの日本選手権が先般千葉市で開催されたが、試合会場が駅から遠く、人があまり来てくれなかったが、東京都の東京体育館で試合があった時は、パラスポーツであるにもかかわらず会場が満員近くなるほど人が来てくれた。今後文化やスポーツの新しい施設をつくる時には、アクセス性や周りの環境が良いと盛り上がると感じている。

（和座委員）

子どものスポーツの部分について、学校医として小学校の検診する中で、大きく2つの課題がある。

1つは肘が痛くなっているなど、オーバーユース等の問題が出てきている。部活動などで良い成績を取ることは重要だと思うが、科学的に子どもたちの指導をしないと問題が出てくる。

もう1つはとにかく体が硬い子どもが多いこと。かかとをつけてしゃがめない子どもが多い。側弯症も多くみられる。片足立ちも5秒もできない。子どもの体の柔軟性がなくなってきている。例えばゆるい部活動のようなものでいいので、もっと運動できるような環境を作らなければいけない。骨量は20歳がピークだが、子どもの間に十分に体を動かしていないと、骨量が増えない。そういった状況の中で子どもたちの体が硬くなってしまうと、その子たちが中年や高齢者になったときに、骨量が少ないために骨粗鬆症等の様々な問題が出てくる。スポーツの部分で子どもたちに対しての関わりを考えた時に、全体的に健康ことを見ながら、科学的に

子どもたちに対処していくことが重要。

またスポーツは健康と結びつきが強い。高齢者もスポーツを通じて、人生の豊かな楽しみながら健康になっていくことが重要。そういった観点を認識して取り組みを考えなければいけない。またいろいろな人たちが、多面的に接点を持つことでスポーツが楽しみになると良い。コミュニケーションを取りながらスポーツをやることで、幸福感も生まれてくる。

(小島委員)

文化財保護法や博物館法に則った立場で活動している。そのため、私が言う文化は、先ほどゲストスピーカーの方々が使う意味とは少し違う。そこで暮らしている人たちが当たり前だと思っていることが文化であるという捉え方。

1つ目の文化の施策によってどのような松戸市のまちづくりができるかは、第1回の審議会で資料として配られた松戸市文化財保存活用地域計画をぜひご参照いただきたい。これまで行政が中心となってきた文化財指定を、地域の方々、市民総がかりで、自分たちで発見していこう試みを具体化させたものが当該計画であり、1つの考え方として参考になるかと思う。

2つ目、先ほどのまちづくりの実現のために個々の活動や分野がどのようにネットワーク化できるかことについては、当該計画の報告書の中に既に作ってある。しかし、これは各地区、地域で重層的に積み上げられてきた文化をどうやって文化財として評価していくか視点であるため、そういった意味で今日の議論にはそぐわないが、ここをきちんと理解できていなければ、表層的な話で終わってしまうので、当該計画について、ぜひもう一度ご参照いただければと思う。

3つ目の事例について、学校教育との関連等の話題もでていたが、松戸市の博物館は子どもミュージアムことも含めて既にリニューアルの計画が進んでいる。松戸で仕事をしていて難しいと思うのは、松戸市内のいろいろな情報がうまく伝わっていない。博物館は博学連携事業で、小学校の先生方にも加わっていただき、いろいろな事業をやっている。小学生学芸員なんかも、毎回すばらしい作品が出る。そういったことが共有されていない。そういうことも踏まえて、あらゆることをさらに広げてつないでいく、そういう場になればいいなと考えている。

(田簀副会長)

この先どうまとまっていくのかも重要だが、松戸を好きになることが重要と感じながら聞いていた。

(熊倉会長)

政策を作るのは難しく、皆様から、個別具体の活動や他市の事例等を調べていただいた。

先ほども話題になった1つ1つの点が点にすぎないのは、文化もスポーツもそも

そもそれが自然の姿である。本来そうで、これまでの行政は総花的にいろいろなところに少しずつお金を出していたのかもしれない。

しかし人口減少社会の中で、そうしたことがなかなか難しいとなった時に、まちづくりの視点で、これからの行政が何をしていくのかを考えていく必要がある。自分たちが自分たちのやりたいことを一生懸命やるだけでなく、50年後100年後の地域づくりにどう寄与しうのか視点を一人ひとりが持たないと、まちづくりは実現していかない。

皆様の個別の活動やこうもの方がいいという考えなど、今日たくさんヒントはいただいた。今後の方針には、具体的な言葉よりは抽象的な文言が並んでくと思う。皆様が前回と今回おっしゃったことを、方針の言葉に集約させたときに、その言葉でよいのか、こちらの言葉の方がイメージが膨らむのではないかというような段階に、次回あたりから入らないと、方針はまとまっていかない。

審議会では、方針をどう具現化していくのかという役割はないが、具体的に何をしていけばよいのか、例えば組織を作った方がなどは盛り込める。次の議論には、優先的に取り組んでいった方がよい取り組みを意思表示できる。それぞれ、大事にしたいところ、外せないことを次に議論していきたい。

それでは次の議事について、事務局から説明を。

議事3 次年度のスケジュールについて

(文化スポーツ政策課長)

資料3を用いて説明。

(熊倉会長)

資料中段の7～8月頃の欄に講演会開催とあるが、講演会とは何か。

(事務局)

本市の文化芸術・スポーツを通じたまちづくりや今回の方針について、市民とともに考える機会として実施したく、基調講演や関係者にご参集いただくパネルディスカッション等を予定している。詳細決定後、審議会の中でも報告したい。

(熊倉会長)

他に意見がないようであれば、以上をもって、令和6年度第2回松戸市文化スポーツ推進審議会を終了とする。

議事4 その他

・事務局より事務連絡。

閉会